在デュッセルドルフ・ポーランド文化センター日本デー関連展示会
ヤクブ・ヴォイナロフスキ：「漫画とそれ以上」オープニング挨拶

２０１６年5月２１日
総領事　水内龍太

過去にいろいろな文化が互いに影響しあい、それによって様々な様式の伝播が起こってきことには驚かされるものです。例えば日本の芸術、特に江戸時代の浮世絵（葛飾北斎や喜多川歌麿等）が１９世紀に欧州に紹介され、フランスの印象派やウィーンのユーゲント様式にインスピレーションを与えました。一般的に、ジャポニスムがそこから欧州を席巻したことは知られているところですが、その影響がどこまで及んだのかについて、私は必ずしも承知していませんでした。今回在デュッセルドルフ・ポーランド文化センターが我々に紹介してくれる展覧会は、すべての疑問に答えるものではないにしても、少なくとも１つの手がかりを与えてくれます。

今しがた伺ったところですが、数多くのポーランド人芸術家もジャポニスムの影響を受けたとのことです。数週間前から展示されていた、映画監督アンジェイ・ワイダの作品集も、その例をはっきりと示してくれるものでした。そして、本日開会を迎える展示会「日本への旅その２」により、この実験の第２幕が切り落とされます。それは、日本人とポーランド人の間に懸けられた、芸術的ないし精神的な橋、つまり、本来は目に見えない橋を、非常に印象的な形で見せてくれるものです。ポーランド文化センターのシュウィートンスカ所長のこのような努力に対し、心から御礼申し上げます。

この場を借りて、日本とポーランドの友情についてお話ししたいと思います。我々両民族を緊密に結びつけているのは、特に地政学的な情勢とロシアという隣国との関係です。ポーランドは、１８世紀末のプロイセン、オーストリア及びロシアによる領土分割の後、他国の支配下にありました。既にこの時代、より具体的には日露戦争（１９０４－１９０５年）の前夜に、ワルシャワを頻繁に訪れている日本人がいました。その人の名は広瀬武夫中佐といいます。当時海軍武官としてサンクトペテルブルクの日本公使館に駐在していた人で、私の高校の大先輩です。彼の使命は諜報活動であり、情報収集を行うとともに、ポーランドの地下活動家とも接触を保ちました。

わずか数十年前に欧州列強に対し独立を何とか維持したばかりのアジアの小国日本が大国ロシアに勝利したことは、世界中、中でもポーランドの人々を驚かせました。日本がロシアに勝ったという知らせは、まさに独立を勝ち取ろうとしていたポーランド人を奮い立たせ、ついに第１次大戦のあと、独立を再び得ることになります。日本海海戦でロシアのバルチック艦隊を完膚なきまでにやっつけた東郷平八郎元帥は、ポーランドの人々に熱狂さ

れ、１９２６年にはポーランド独立に貢献した功績により、「再生ポーランド勲章大綬章」（Grosskreuz des Ordens der Wiedergeburt Polens）を授与されます。

日本とポーランドを結びつけるもう一つの出来事は、シベリアにいたポーランド人孤児７６５人の救出物語です。ロシアには数万人（一説には１５万から２０万人）のポーランド人がいたと言われていますが、それは、多くの地下活動家がロシアの拘禁下にあったからで、その一部はシベリアに強制移住させられていました。ロシア革命が勃発した時、これらの人々の状況は悲惨を極めました。１９１９年にウラジオストック在住のポーランド人が、逃亡や飢え、寒さや病気により両親を失った孤児たちだけでも助けようと、救出活動を組織しました。彼らは支援要請を世界中に向かって発信しましたが、それに唯一応えた国が日本でした。救出活動が２回にわたって実施され（１９２０年と１９２２年)、陸軍、日本赤十字社、その他民間人が参加しました。救出された子供たちは日本に輸送され、手厚く保護された後、ポーランドに送られました。

今回の展示会の計画によって、このような日・ポーランド関係の歴史の一端を想起していただいた点においても、ポーランド文化センターに感謝いたします。この展示会が、今晩のライン河畔の花火の後も日本、ドイツ、ポーランドその他の国の多数の訪問者でにぎわうことを希望します。さらに、この展示会が、日・ポーランド両国の友好関係を深化させるとともに、諸民族間の融和にも貢献することを希望します。最後に、日本デーがポーランドの参加を得て、ますます国際化することを祈ります。